

まぶたに焼きついている。

私も満州に渡って七年、金千円也をもらって、舞鶴港に上陸、その日は昭和二十一年一月一日午後五時頃だった。町並みは、暗く、重いリックを背負い、家族の待つ実家に帰った。無事帰宅できた。長い間、家族がお世話になったので、よくお礼を述べ、今は亡き父にも、報告した。

いよいよ、財産を失った丸裸の生活がやってきたのだ。当時の食生活は想像以上のひどいものだった、七人家族の生活が始まった。休む暇もなく職探しの毎日だった。ある友人に誘われ、宮城県石巻に魚の買い出しについていった。

仙台駅で朝一番の電車に乗った。当時は統制配給の時代で、道路の両側には闇市場が開かれていた。魚の豊富さには驚かされた。月に六、七回は出かけた。差し引きで三千円位もうかった。しかし、取り締まりが強化され、没収される回数が多くなり、闇屋をやめてしまった。ちょうど手頃な家があった。玄関つき六畳二間で六千円で買い求めた。家族も三男一女となり、長男は東京の親

戚のパン製造工場に就職した。いつのまにか、世の中が安定に向い、いろいろな物資が出回ってきた。私も青果仲買業を始め、農業からジャガイモ、枝豆、蜂矢柿などを買いつけ、出荷するような仕事をした。

全国的にも野菜の産地であり、枝豆などは毎日三千貫も出荷し、一部は冷凍工場に回した。何年か経つうちに、量より質の時代になり、青果物等の取り引きも変わり、荷受機関として大きな市場も出来た。

手頃な土地を百坪買い求め、その年の十一月新居に引っ越す事ができた。とてもありがたい事と思っている。

## 私の戦前・戦中・戦後

福島県 石川 佐 中

### 海外居住の動機と職務

昭和十九年八月十一日私は、勤務中の宮城県塩釜市の塩釜神社から、旅順市に創建される関東神宮職員として赴任するため、妻同伴の出張を命じられた、かねて海外

神社に奉仕する希望を持っていた私は、その達成されるうれしさで、戦局の悪化を憂慮する近親者の意見に耳を傾ける余裕もなく、唯一途に故郷の地を後にしたのである。

関釜連絡船に乗船する直前、米国潜水艦の出没が激しく、下関港に数日間足止めされ、容易ならざる事態を思い知らされたのであったが、家財一切を挙げて出発した関係上、今更引き返すこともならず、改めて悲愴な決意を固め、目的地に向かって進んだのであった。

朝鮮を北上して鴨緑江を渡り、南満鉄道を南に下って旅順市に到着した時は、さすがに緊張と心身の疲労を痛感したが、先着の職員に迎えられてやや安堵することが出来た。

関東局から九月一日付、「官幣大社関東神宮主典を命ずる」辞令を受け、十月一日世紀の大遷座祭に奉仕して以来、翌二十年七月までの間は、新しい神宮の運営と神徳宣揚のため、全力投球の勤務をしたのであるが、私にとってこの時期は過去最高のものであった。

## 敗戦と戦後の生活

現地における職務遂行は、日滿両国民の融和と支援により、極めて順調に推移したのであるが、家庭的には、長途の旅と異郷の生活が原因で妻は体調を崩し、初めて誕生した長女を、生後二週間であうという悲しい事態に遭遇した。

敗戦の僅か前、私は現地召集を受けて海城の輜重隊に入隊した。軍務に服する間もなく終戦、その後ソ連軍に収容されて抑留の身となり、以来四年の長きに亘って、捕虜生活を余儀なくされた。タシケントにおける生活は、二度も生死をさまよう病気に侵されたのを始め、筆舌に尽し難い辛苦の毎日であったことは、四十余年の今もお忘れられない。

一方、妻は八月十五日、悪夢の如き敗戦を迎え、中国人の民衆は、それでも極端な仕打ちに出ることはなかったが、ソ連軍は雪崩の如く侵入した。そして、ありとあらゆる乱暴狼藉をはたらき、家財道具や衣類・食料を徴発し、生命の危険にさらされるなどの惨状を呈した。

旅順市在住の日本人は、三日以内に退去すべしとの強制命令が出た。一万五十人と言われた在留邦人は、わず

かな身回り品を持っただけで、寄るあてもないまま大連市へ四十キロの道のりを昼夜の別なく歩き続けた。

命からが大連に辿りついた難民は、伝手を求めてさまよい、漸く雨風を凌ぐ住宅を探した。しかしたちまちその日からの食にも窮し、収入を得る職にもあり付けず、果ては無けなしの身回り品を町で立売りして、どうにか命を保つ以外なす術がなかったのである。

幸か、不幸か妻は、かかる惨状の中で二十一年長男を分娩した。細々と高粱粥をすする身体からは、満足な母乳の出るはずもなく、ミルクを求める金もなく、毎夜空腹に泣く乳児を抱きしめ、身を切られる思いに、ともに泣き明かしたのであった。

#### 引き揚げ後の再出発

妻は幼児を守って二十二年二月、着のみ着のままそれでも無事故郷に帰ったが、その直後長男は不帰の旅路に旅立った。私は二十四年九月二日舞鶴の地を踏むことが出来たため、夫婦は再会することが叶ったのである。

ソ連抑留の永い引き揚げ者にとって、祖国の風は冷たく厳しかった。家財道具もない二人の家庭の再建は並大

抵ではなかった。就職の門は堅く閉ざされ、暗い気持ちの毎日がいつ果てるともなく続いた。

やがて数か月後、知人の骨折りで私は町役場の臨時職員に、妻は農協の売店に雇傭された時は、まさに暗夜に灯火を得た如く、夫婦手を執り合って欽喜雀躍の思いをしたものである。月の手当を受けるたびに、先ず鍋釜・食器・食卓から買い求め、下着・衣類を整えて行くのであったが、それでも若さと健康に恵まれた、再生への希望が徐々に増幅されていったのである。

薄給ながら少しずつ生活に安定をもたらした二十五年、二十七年と続いて女兒が誕生して、時にはわが家に笑い声が起こるまでに至ったのは、優しく気丈な妻の努力と愛情が、常にその源をなしていたものであった。

#### シベリアから復員までの労苦

愛知県 板倉博明

私は、十四歳の昭和十六年に父に連れられて、満州国